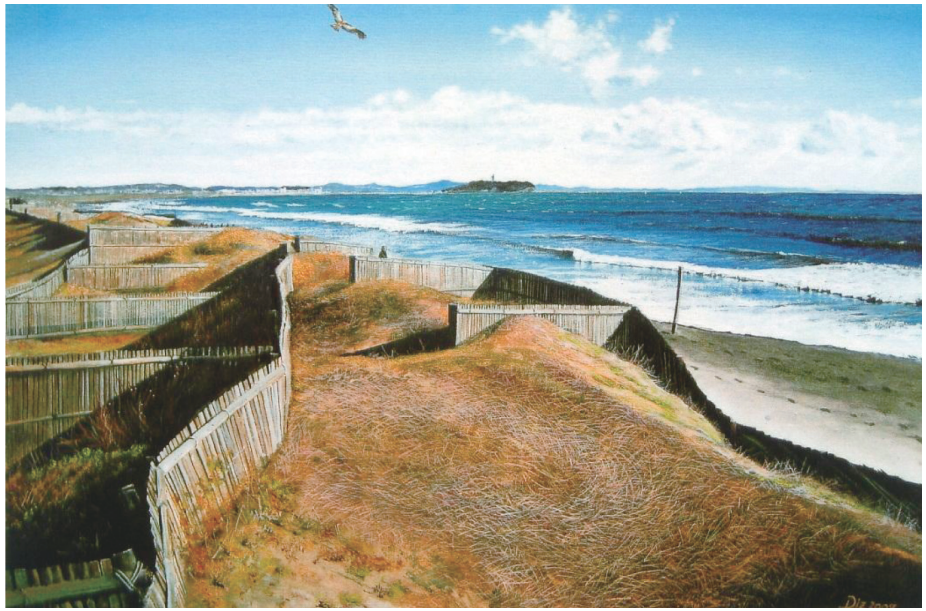
作品 1「今はなき友人たち」（東海岸）

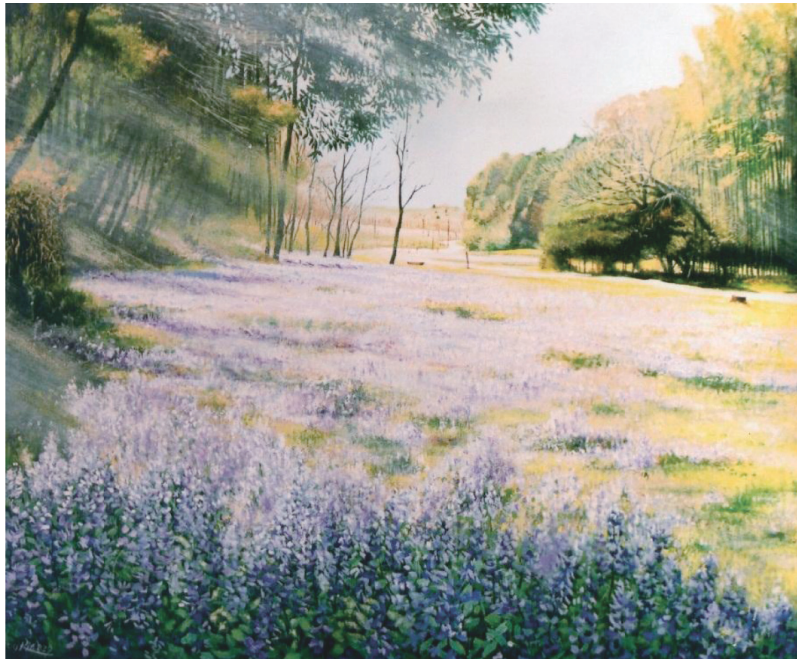
作品 2「夢の続き」（南湖西浜）

作品 3「輝きすぎて」（東海岸）

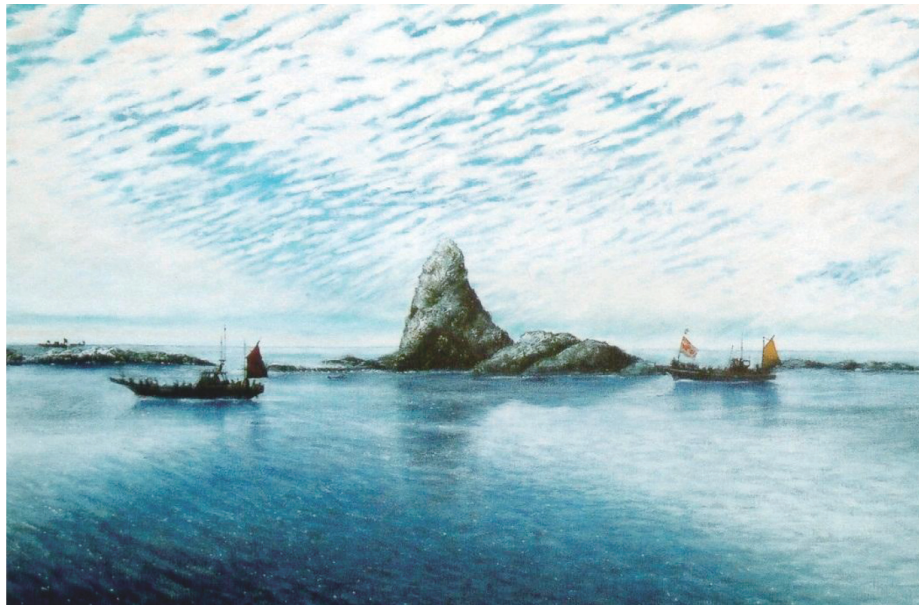
作品 4「陸に上がった舟」（菱沼海岸）



作品 5「砂よ止まれ」（東海岸）



作品 6「やさしく紫」（芹沢）



作品 7「光集めるえぼし」（中海岸）

作品 8「アン・ハサウェイの春庭」（英国）

文化資料館調査研究報告(22)：59-64, 2013

風景画家・山科律ノート
―茅ヶ崎美術史の一コマ―

平山　孝通(*1)

1　はじめに

２０１２年（平成２４）１１月上旬、平塚駅前の「元麻布ギャラリー平塚」で開催の「英国の春と湘南散歩、２０１２、山科律風景画展、３３ｔｈ」に足を運んだ。茅ヶ崎市下寺尾在住の画家・山科律氏の個展である。

この５月下旬に数週間訪れた英国のエジンバラからカンタベリーまでの花々が咲き乱れる家や街を訪ね歩いた小品１８点、薔薇の小品８点、得意の湘南風景１５点など合計５０点あまりを展示している。

氏は近年は年に３回の個展を開き、市内外の多くのファンを魅了している。遠く静岡から足を運ぶ方もいる。

地元の神奈川県立茅ヶ崎北陵高等学校を卒業し、２７年間務めた茅ヶ崎市消防署を辞した１０年前から本格的にプロの画家としての活動をはじめて、今回で個展は３３回を数えた。

作品はアクリル専用キャンバスに、アクリル絵の具で描かれている。大変鮮やかな色調である。アクリル絵の具の特徴は、光に強くほとんど変色や退色はなく、早く乾き、無臭で、割と廉価であるとのことである。また、アクリル絵の具で抽象画や現代絵画を描く画家は多くいるが、風景画を描く人はほとんどいないとのことである。その意味でも稀な作風といえる。氏の作品は具象画のみで、抽象画は描かない。

額縁も素晴らしく作品の一つといえる。古い流木や古い舟材の感じを醸している。筆者は古材を求め加工したものと信じていたが、違った。新材を求め、自らドリルや彫刻刀を駆使してあたかも流木と見紛う加工を施していたのである。額縁の作製には多くの時間を割くこともあるとか。

師事された方はとの問いに、「とくにはいないが、強いていえば師は“自然”そのもの」と語った。

取材のために年に２回は海外に赴いている。

地域名を記してみよう。イングランド・南フランス・スペイン・イタリア・ニュージーランド・東欧（チェコ・スロバキア・ハンガリー・オーストリア）・スイス・フィジー・マナマ・カナダ東部・ベネルグス３国・中国・スカンジナビア４国・ギリシャ・カナディアンロッキー・北フランス・ドイツ・トルコ・エジプト・イタリア北部・イギリスなど２０回以上の渡航で２９の国と地域を訪ねて、取材と知識見聞を広めるだけでなく、その都度素晴らしい作品が生まれている。

国内では、西四国・南アルプス・北海道・沖縄本島などの取材を重ねている。

何のために海外を訪ねるのかという愚問に、「ありのままの茅ヶ崎を描きたい。そのために、茅ヶ崎を知るために、海外の取材に行く。井の中の蛙ではだめだ」と即答された。同感である。

年間大小８０点あまりの作品を手がけている。１週間に１枚以上の作品を成していることになる。大変なことと感服すると、即座に「楽しいからですよ。描いていると楽しいから」との答えが帰ってきた。至極当然のことと感じたが、それを１０年間も継続される努力と体力は大変なことといえる。

現在６２歳。８０歳までは描き続けるとの現役発言に頼もしさを感じた。そのためには以前から継続されている硬式テニスの練習は欠かさないという。ちなみに、消防署時代に署の野球部のエースとしての活躍を 鮮明に記憶している後輩は今でも多いという。

2　作品集

作品集をすでに２冊を上梓している。

『山科律画集「序」１９９７～２００６』（２０

０６年１２月７日発行）と『山科律画集「壱」２００７～２０１１』（２０１１年１２月７日発行）である。

１冊目の作品集「序」は６００作品の制作の節目の記念として発行し、国内外の６８作品がカラーで掲載されている。作品には、２行（７０字前後）の適切なコメントが付けられていて、作品を鑑賞する上では有益である。

湘南の作品として、茅ヶ崎（１５点）と江ノ島・鎌倉（６点）の風景２１点が収録されている。茅ヶ崎の作品の表題とコメントの一部を抽出してみよう。県外や海外風景は次の機会に検討したい。

【茅ヶ崎市東海岸、南湖西浜での作品のコメント】

（……は省略部分）

・今はなき友人たち「茅ヶ崎のランドマークだったパシフィックホテルも、赤い屋根の茅ヶ崎ゴルフ場の三角屋根も、今はない、……」（東海岸）《自作の写真を参考にパシフィックホテルなどを作品に成すこともある》

作品１

・劇的！南湖「南湖西浜の夕日はすごい！……」（南湖西浜）

・いにしえの風「（この舟は）今でも現役、地引き網には大活躍、この風景だけを見ると時代を間違えたかなって感じ、実にノスタルジックですね、……」（東海岸）

・ぬくい日ざし「眩しい光の降りしきる浜、一年中波と遊べるここ湘南、砂と砂防の竹柵の織り成す直線と曲線の妙、けっこう冬も楽しめるものです、……」（東海岸）

・はなだ色の浜「暑い真夏のさなか時としてこんな表情をする南湖の浜、小山敬三氏や国木田独歩氏、桑田佳祐氏ならどんな表現をするのかな」（南湖西浜）

・夢の続き「黒澤の映像にも出てきそうな、夢色の南湖西浜、こんな優しい色に包まれたら夢よ覚めないで！　と思わず叫びそうですね、自然はもともと美しいもの！」（南湖西浜）《氏の名刺の裏面に使っている。自信作であろう》

作品２

・ＴＨＥ烏帽子岩「柳島・中海岸・浜須賀、それぞれから見る岩の形違いには恐ろしさを感じる」（以下、東海岸）

・ホツ！えぼし「鴇色の夕日を映す、雲と波頭、こんなに大きかったのかと驚く大島、心穏やかにすごせる、茅ヶ崎海岸の一時ですね！　何も考えずにの～んびり」

・えぼしと江ノ島「船上からしか見られないえぼし越しの江ノ島、乙なものですね！　斜めの断層縞もくっきり見えて、どっしりしていますね！　……」

・輝きすぎて「茅ヶ崎の東海岸は南中のころ、えぼしがらみの陽光の眩しいこと、小さな波濤にも反射して、薄目を開けて、この喜びに浸ります、きらきらと沢山の色が」

作品３

【同市　下寺尾、芹沢での作品のコメント】

・希望「小出は下寺尾と堤の堺のしいのき坂、文教大へ抜ける切通し、下の方はとても暗くシットリ、登り詰めれば行き先には何と、希望の光が……」（下寺尾）

・さそわれて「芹沢の外周を歩いていると、いつものこんな枝道が、中央の丘陵へと誘いを掛ける、……」（以下、芹沢）

・まちぼうけ「ここはたれが言うのか、茅ヶ崎の軽井沢またはチベット、それだけに自然はたっぷり！　……」

・紫色に乾杯「あなたにとってこの風景、何ですか？私にはズーとゾーと永遠に取って置きたい春の風景です、紫と黄緑が織り成す一年の始まり、……」

・秋色のきつね坂「ここは茅ヶ崎の北の丘（海抜 50 m）、素敵な主人のギャラリー喫茶「木の実」前、お洒落な秋色でしょう！　たまに畑の中に狐の足跡が…楽しいでしょう」

２冊目の作品集「壱」は１０００作品制作の記念として発行し、７４作品がカラーで収録されている。作品には、３行（９０字前後）の適切なコメントが

付けられていて、「序」同様に作品を鑑賞するには欠かせないものである。

湘南の作品として、茅ヶ崎（１３点）と江ノ島・鎌倉（２点）の風景１５点が収録されている。茅ヶ崎の作品の表題とコメントの一部を抽出してみよう。

【茅ヶ崎市柳島海岸、菱沼海岸、東海岸、汐見台での作品のコメント】

・赤い烏帽子岩「初日の出を見ようと、６時、キリッとした大気の中、……茅ヶ崎の西の端の柳島海岸へ、西には凛として富士山が佇み、……微笑みのご来光」（柳島海岸）

・茅ヶ崎大好き「ここに移り住んでほぼ４５年、パシフィックホテルもなくなり、海岸線も痩せ細り、烏帽子岩だけが生き残る！？　寂しい気持ちにもなるけれど、伊豆半島に富士山と太平洋、……」（菱沼海岸）

・すきりと茅ヶ崎「藤沢と平塚に挟まれたこの海岸、……　柔らかなラインの海岸線、そして、手作りの木造船、……」（東海岸）

・陸に上がった舟「とうとう終わりか！　この美しくどっしりとした、木製の釣り舟も！　地引き網を最後に、この辺の海岸から引退です、汐を目いっぱい含んで深く刻まれたしわの何とも素敵で「素」のままで退く、潔さ！」（菱沼海岸）《これこそ、手作りの額縁のイメージ》

作品４

・静かな海「茅ヶ崎漁港から鵠沼プールガーデン間の波打ち際を走ったり、熱くなった体を冷やすのにジャージのまま海水に飛び込んだりで、……」（東海岸）

・砂よ止まれ「竹製の砂防柵、国内でもあまり見かけません！　湘南の海岸には欠かせない、素敵なものに思えます！　……」（東海岸）《砂防柵は茅ヶ崎海岸の代表的風景の一つ》

作品５

・冬も湘南「冬の海岸は一人、歩いたり走ったり貝や石を拾ったりで、……」（汐見台）

・Ｋ子の海「湘南海岸独特なムードは、女性サーファーの台頭によるものなのか！？　……」

・湘南はチャリンコで「遊歩道は猛暑でも潮風を感じながらスイスイと鼻唄交じりの自転車！　強風で溜まった砂を排除してくれるボランティアのおじさんに感謝！」（汐見台）

【同市　芹沢・柳谷、芹沢・塩川家での作品のコメント】

・桃色吐息「茅ヶ崎の北の端、今は県立里山公園の一部、日本武尊が腰かけた石が祭られている腰掛神社やギャラリー木の実の少し北側からの春の眺め、鶯もさえずり、……」（芹沢・柳谷）

・日本人の求めるもの「塩川家の桜並木、お母様がここに嫁いだときに植えた苗木が！　力強く、厳かに、咲き誇る！　……」（芹沢・塩川家）

・光り創る「早春の朝、自宅で予感通りの霧を感じて目覚め、車で飛ばして５分！　柳谷のポイントで、真っ白な朝霧に浸り切る！　いよいよ日が昇り、息を止めて時を待つ喜び、思い通りの光と影が！」（芹沢・柳谷）

・やさしく紫「柳谷の中央の池の南側に咲き誇った、花大根！　紫の花が群れ、春の木漏れ日が一層の命を与える、何と爽やかに美しいことか！　いつまでもこのままでいてくれと、願ってしまう私である」（芹沢・柳谷）

作品６

以上、コメントの一部を抽出した。海岸風景は勿論のこと、地元小出の風景をプロとしてこれほど描き続けている画家は少ないのではと思われる。

市民の多くが、氏の作品を鑑賞して、それぞれの感想や評価を述べていただきたいが、まずは、画家の言葉で作品の意図や立位置を理解するのも鑑賞の一つの方法と言えよう。

それぞれ２００部の印刷。高価な作品集ではあるが、求める人も多いという。茅ヶ崎市立図書館などに寄贈されているので手にされ、鑑賞することを奨めたい。

一読して、驚かれることは必定である。

勿論、作品集の３冊目『山科律画集「弐」２０１

２～２０ＸＸ』の発行を待つの筆者だけではない。平成２４年１１月上旬で、１０７０余の作品を成しているとか。節目を迎えるのはいつのことだろうか、早めの発刊を期待したい。

３　個展

個展は作品の評価を世に問うために精力的に開いている。

『画集「壱」』の巻末の「年譜」でその足跡を追ってみよう。

第１回の個展は、１９９８年６月に４８歳で「茅ヶ崎サティー」で開いた。手応えはそれなりに感じたようであった。

第２回は、２０００年７月、駅前の「茅ヶ崎市民ギャラリー」で、前年の１０月にイングランドで成した作品を中心に開催した。

２００２年３月に、２７年間務めた職場を熟慮の上離れた。定年後に本格的に画家としての道を模索していたさなかのことであるが、８年も早く画家として専念する道を選ばれた。大変な決断である。その年の５月に南フランス、８月にスペインの取材を行い、１２月には「茅ヶ崎市美術館」で個展を開催した。この個展の開催は大変重い意味を持つといえよう。

翌２００３年１月に「画家としてスタート」と記している。このあたりの心の葛藤や画家誕生の秘話を、８０歳の頃になったらうかがいたいものである。６０代ではまだまだ早いと思っている。

その後は、年に２乃至３回、多い年で４回の個展を開催している。

個展の会場は、茅ヶ崎サティー、茅ヶ崎市民ギャラリー、ハスキーズギャラリー、ギャラリーキテーネ、ギャラリー木の実、地元のギャラリーみずき、元麻布ギャラリー平塚などであり、圧倒的に市内中心といえる。元麻布ギャラリー平塚も茅ヶ崎市内から急遽変更になったようである。

また、東京都美術館でのインターナショナルアーティスト展への参画及びギャラリーみずきのオープン展示への協力がみられる。

筆者には、氏の「茅ヶ崎の風景を、市民に、市内で鑑賞してもらいたい」との強いメッセージが幾重にも重なって伝わってくる。

会場では、「絵はがき」の購入もできる。

毎回のこととはいえ、数十枚の展示用作品の搬入出などには、奥様はもとよりお２人のお嬢様方のお力添えが大きい。家族の絆なくしては、氏の画業及び個展は成り立たないのである。

４　諸活動

その他の活動の一端を記しておこう。

２００７年３月より、請われて地域の小出コミニティセンターで、絵画教室「湘南の風」を主宰している。月２回、１０数人に対して指導を続けられている。現在の最高齢者は８５歳であるが、大変意欲的な方々が多いとのことである。後継者の育成にも心がけている。

６年前より茅ヶ崎駅自由通路の観光案内所の一角に作品を展示して、３ヵ月ごとに作品を掛け替えている。うれしい反応があったという。朝晩、その作品を鑑賞するのが、通勤途中の楽しみという市民の声が聞こえてきたというが、画家にとってこれ以上の喜びはないであろう。茅ヶ崎市観光協会では、２００５年１月に氏の作品を１２枚セットの絵はがきにして「茅ヶ崎浜辺の風」（**作品７**）として販売した。人気は高いという。最近、筆者は国道一号沿いの時計店の店頭の飾りとして、この絵はがき数枚を掲示する様子を見ることができた。数少ない市内の絵はがきの一つといえる。

母校・神奈川県立茅ヶ崎北陵高等学校に、作品を求め寄贈してくれた校長先生がいた。在校生への励みの一つともなる文化的行為といえる。寄贈した篠田校長先生には感謝していると語った。

高等学校の同級生から、母校の出版物の１冊に氏の作品が掲載されているという情報が寄せられたが、既に今日の萌芽を予感させる才能を発揮していたのである。機会を与えた周囲の同級生及び先生方の目もまた素晴らしい。評価したい。

５　終わりに

最後にお願いの幾つかを記す。

茅ヶ崎の風景を描かれる画家は、意外に少ないので、一作品でも多く、茅ヶ崎のありのままの現状をキャンバスに留めていただきたい。それらの作品は茅ヶ崎の

歴史の証言としていつまでも後世に伝える意味があると思う。

駅自由通路の観光案内所における作品の展示はいつまでも続けられて、市民のみならず観光客の方々にも「湘南の海」を堪能していただきたいものである。

次回の個展を楽しみにしているファンは多いであろう。そこでは茅ヶ崎の取材は勿論のこと、海外の取材の楽しい話などを色々とうかがいたいものである。

この小文は絵画に対して何も知識を持たない筆者が、久しぶりに山科氏の個展（招待状の裏面、**作品８**）に足を運んだ時の感動の一端を記したものである。氏よりお叱りを受ける記述もあるとは思うが、一市民の拙い感想とご寛容をいただきたい。

追　記

この拙文の表題を当初「郷土史家」に倣って「郷土画家」と考えたが、郷土に留まらない画業を展開されている氏の活躍を考えて名刺に記される「風景画家」とした。

文末ながら、今回も社会教育課の高橋知氏、文化資料館の須藤格氏、文化生涯学習課の杉本斐香氏・井上香乃氏ら若手職員のご協力を得た。心より感謝したい。

（２０１３年３月３日記）

*1　茅ヶ崎市文化生涯学習課市史編さん担当